

早稲田大学大学院文学研究科
博士学位申請論文審査報告要旨

論文提出者氏名	伊藤 涼
学位の種類	博士(文学)
論文題目	魏晋玄学史の研究
審査要旨	
<p>伊藤涼氏の博士学位申請論文(以下、論文と略称)は、中国の魏晋南北朝時代に流行した「玄学」という学問思潮について論じたものである。論文は、「序章」、「第一章、何晏の思想」、「第二章、王弼の思想」、「第三章、郭象の思想」、「第四章、張湛の思想」、「終章」より成り、最後に文献目録が付される。以下、章ごとに内容を整理する。</p> <p>「第一章、何晏の思想」では、「玄学」思潮の嚆矢である何晏の思想が検討されている。何晏は、曹爽政権の吏部尚書として活躍した人物であるが、本章では、そうした何晏の実際政治の場での主張を支える理念であった「聖人統治(理想的な君主による統治)」の思想について、それが儒家の一般的理解を踏襲しながらも、『易』の思想や『老子』に基づく形而上学的な議論によって補強されていることが明らかにされる。</p> <p>「第二章、王弼の思想」では、何晏の思想を継承しながらもより洗練された理論を打ち立てた、王弼思想の全貌が検討されている。本章では、まず王弼が『老子』注において、『老子』本来の「道」概念が持っていた起源としての性格をそぎ落として、純粋に根源的な性格のみが残る「道」概念として再設定していること、さらにその「道」概念が政治思想へと接続しており、聖人が「道」を用いていることによって「道」の性質を引き受け、直接的には何もしなくとも万物も治められるという「無為の治」の理論を形成していることが指摘され、そのうえで、王弼がそうした『老子』注で確立した「道」概念およびそれに基づく「聖人統治」の理論を、『周易』や『論語』という儒家系典籍の注釈にも反映させていることが指摘される。そして、このことから王弼の思想というのは、『老子』という儒教の外部の思想を用いて、儒教がもつ「聖人統治」の理論を補強したうえで、その洗練された新たな形式の儒教的世界観を提示しようとしたものであったと結論づけられる。</p> <p>「第三章、郭象の思想」では、何晏や王弼に後続する思想家でありながら、彼らの思想を一部否定している郭象の思想について検討されている。本章では、郭象が、何晏や王弼のように万物に根源があることは認めておらず、万物はそれぞれ自身を根拠として存在・活動するとして一方で、聖人の「無為」を「直だ各と其の自為に任す」と定義することで、物の「自為」に任す聖人が万物を治めているという構造を保存していることが明らかにされ、このことから郭象も、あくまで「聖人統治」という思考枠組みのなかで、それを理論的に補強するという方法を取りながら自身の主張を行っていたことが指摘されている。</p> <p>「第四章、張湛の思想」では、何晏・王弼・向秀・郭象といった先行する玄学諸説を引用・踏襲して『列子』に注釈を施した東晋の張湛の思想について検討されている。張湛は、従来の玄学諸説を総合した思想を形成しているが、一方で「聖人統治」という儒教が本来もっていた枠組みの中で理論を競っていた従来の玄学諸説に比べると、統治の主体としての聖人の存在、あるいは「聖人統治」という枠組みそれ自体の比重が低下しており、結果的に、彼らの思想を総合しながらも、現実を根拠づける側面や儒教の枠内で思想が形成される側面が失われて、それまでの玄学諸説とは性質を異にした学問へとなっていることが明らかにされている。</p> <p>以上のように、本論文は、何晏・王弼・郭象・張湛の思想を取り上げて、「玄学」の特徴および展開が明らかにしたものであり、「終章」では、とくに何晏・王弼・郭象の思想に共通の思想的傾向が見られることから、彼らの思想を「魏晋玄学」と呼称したうえで、『周易』・『老子』・『荘子』を援用した形而上学的理論、とりわけ世界のあり方や構造についての理論をもつ、「彼らの思想があくまで儒教の体系のうちで展開しており、上記の形而上学的な構想も儒教の「聖人統治」の理論に組み込まれている」、「彼らのこうした思想が、現実の政治・社会状</p>	

況に対応している」という三つの特徴をもつことが指摘され、「要するに「魏晋玄学」というのは、老荘思想を援用した形而上学的理論を取り込むことで、儒教思想の内的拡充を図り、現実の状況に対応する理論を提出している学問である」と結論づけられている。

こうした従来とは大きく異なった「玄学」理解に対して、公開審査会では、まず王弼に関する議論に対して、「聖人統治」という構造のなかで、民から感知されない聖人を想定しながらどのように民を治めているのか、ということについての具体的な把握をさらに行うべきではなかったか、その時に「象」を介して聖人の「意」に接近する王弼の言語論が重要な手がかりになるのではないか、という問題提起が行われた。また、「予め言語を忘れる」という王弼の政治哲学のなかで出来事が発生し得るのか、ないとすれば彼らが描いている「聖人統治」のあり方はどんな空間なのか、何をしているのかについて更なる考察を行う余地があったのではないか、という問題提起も行われた。

他に、『老子』本文の内容を越えて王弼の思想が形成されている旨の言及があったが、『老子』と王弼の注釈がどれほど離れていると言えるのか、そのことを言うならば他の解釈との比較検討をもっと行う必要があったのではないか、という問題提起が行われた。さらに、本人達の意図として、儒教のうちで思想を形成していると考えられる資料はないのかという質問があったが、これに対しては、直接的に言及される資料はないが、儒教と考えていたと読み取れるという回答を得た。

また、従来の「玄学」研究と比べて、とくに儒教研究との関わりのなかでどのような意義があるのかという質問があったが、これに対しては、論文によって「玄学」が儒教思想の内的拡充を図った思想であったことが明らかにされたことで、儒教が外部の思想を取り込みながら儒教思想自体を変容させつつ展開していったという儒教思想史がより明確に想定されること、および「玄学」に登場する概念と他の時代の概念の連続性から概念理解の一助となるという回答を得た。

そして、阮籍・嵇康という検討対象に言及しないことによって、儒教と老荘思想の対立関係・緊張関係によって生まれる「玄学」の広がりについて考慮されない「玄学」像となっているとの指摘もあり、それらの点を踏まえて検討を進めれば、今後更に立体的な「玄学」理解を行うことができる可能性も示唆された。

本論文は、以上の問題点が指摘されたものの、「聖人統治」という従来に見られない視座から「玄学」の再定義が行われたことで、儒教思想のうちで展開する「魏晋玄学」の実相が明らかにされたことが高く評価された。したがって、本審査会は、全員一致で、伊藤涼氏の博士学位申請論文が学位を授与するに相応しい論文であると認めるものである。

審査会開催日	2023年 5月 30日
--------	--------------

審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	渡邊 義浩	古典中国	博士(筑波大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	垣内 景子	朱子学	博士(早稲田大学)
審査委員	東京大学東洋文化研究所・教授	中島 隆博	中国哲学	博士(学術)(東京大学)